

---

# 異世界と遊ぼう

jouet

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界と遊ぼう

### 【著者名】

NO630N

### 【作者名】

jouet

### 【あらすじ】

不自由はしてないけど、一人さびしい女子大生の下に、アドリビトムの皆さんがトリップしてきました…。

# 嵐の前の・・・寂しさ

「ただいま

返事はいつもどちらか

私は靴を脱いでリビングに向かい、固定電話のスイッチを押した。

ヒリヤゲシ 一件元々

再  
生

「沙羅？お母さんです。元気にしてますか？お父さんもお母さんも元気です。学校はどうですか？まだしばらくは帰れそうにないけど、何かあつたら連絡してね。なるべく帰るようになりますから」  
ピー、と機会音がして、母のメッセージは終わった。

私は三池沙羅。18歳の大学生。  
父は考古学者の三池教授。で、世界中の遺跡やらを研究するために、  
大学でのデスクワークのために、家にはほとんどいない。  
母は・・・小さいころこそ、一緒にいてくれたけど、私はもう子供  
じゃない。だから、父の助手に復帰して、夫婦仲良くあちこちへ行  
つている。

というわけで、私は「実家で一人暮らし」という、ちょっと妙な生活をしている。

金銭面には何一つ不自由していない（らしい）のも、西新の仕送りが毎月すごい。そしてこんなにいらない）。

でも、挨拶を返してくれる相手がいない寂しさと、ついでに金 みずゞさん、私にはまだもいないんですよ…。

P  
1  
1  
1  
1  
1  
1  
.

「着信、東雲ぼたん」

友人： といふか、 悪友だつた。

「ほたん？」

『おー沙羅、借りてたゲーム、今から返すわ』

「…また唐突に」

『今近くまで来てるんだ、じゃ』

「…」

彼女は、いつもこのひ。

「ほれ、返したぞ」

「はいはい」

英語の文字が羅列したゲームソフトが手に渡る。  
友人に進められるままはじめたゲームだけど、一通りやってしまつ  
と、寂しさを紛らわしてくれなくなつた。

「じゃ」

「お茶でもどう?」

「この後バイトなんだ、また明日」

…行つちやつた。

「…ふう」

ゲームソフトをその辺において、食事の用意を始める。

今日のメニューは：

「……素うどん、かな」

おいしそうに言い合える人がいないと、料理は手抜きになるもの。  
だしの元を取り出して、おなべを用意して…

ズズズズズズー……………ん……………

「ひいっつー」

地震かと思ってテーブルの下に逃げ込む。  
でも、…・ゆれていな。

「…？？」

3階から音がした（言い忘れてたけど、私の家は無駄に3階建て）。

「…お父さんの本棚…！？」

父の書斎は本の監獄。本棚は常にぎっしり。それが倒れたとなると…

「大惨事じゃないのよ」

うどんはお預け。ため息をつきながら階段を上り、書斎を空けた。ところがどうして。

「…あら？」

なんともない。

「…お母さんのドレスサーかしら」

お母さんの衣裳部屋（通称）…も、なんともない。

「……」

現・物置にして、昔・子供部屋…それしかない。

「もう、こいつ何が崩れたのよお」

私はドアを開けた。

私は、ドアを開けた。.

二  
え

いくつか物は転がってるけど、そんなことは問題じゃない。

9

.....

「ちよ、ちよっと待つでー！」

上刀を閉めると止む。阻止される。

「…一人ぼっちってこんなに精神的にストレスかかるのね…」

「勝手は来たのは悪が二だけと！でも俺たちも…」

「一九四九年九月一日，中國人民政治協商會議在北平召開，會上通過了《共同綱領》，並選出了中央人民政府委員會，毛澤東當選為中央人民政府主席。」

「アタン、ちよこと落ち着きなさい！」

「え？ と  
私はフフイレ。」

「えっと…私はリフィル。リフィル・セイジとおっしゃいます。仲間の手違いでここに飛ばされてしまったの。驚かせてごめんなさい」

「え？ と… あなたは…」

- 1 -

ゞさつ。

田を開けると、物置で、いろんな人に囲まれていた。

「ひやつ」

「あ、起きたよ」

紫の髪の小さい女の子が言つ。

「見ればわかるつづーの」

赤毛の長髪の若者が言つた。

「驚かせたのは事実だけど、氣絶するなんて…」

さつきの女の人の声だ。

「改めて、あなたの話を聞きたいんだけど、良いかしら」  
じつ、と9人から見詰められる。

女の子と赤毛さんに加えて…。

銀髪の女人、金髪の鎧の人、ピンクの髪のかわいい女人、  
青い髪の…おでこが広い人、ライフルを持った年配の男性、  
黒髪に青い服の女人、茶色い髪に不思議な服の若者。

拒否権はなさそう。

「……とりあえず、靴を脱いでください」

埃の上に泥がついた床を見て、またため息をついた。

場所を移して、リピング。

頬をつねっても田は覚めないし、何より痛いので、厳格でも夢でも  
なさそう。

「…まず、何からお聞きし、何からお話すれば?」

お茶（私の大好きなゆず茶）を仕度しながら、話をする。

「そうね…あなたのことはなんと呼べばいいのかしら」

「…三三<sup>ミイケサラ</sup>池沙羅。沙羅でかまいません」

「そう。さつきも言つたけど、私はリフィルよ」

「…はー」

「早速だけど…」<sup>ヒ</sup>はどこなの？」

「…そのまえに、なぜあなたたちは<sup>ヒ</sup>に<sup>ヒ</sup>？」

「さつきも言つたとおりだけど、仲間がある実験をしていて、その失敗のせいだと思うわ。それで、ここに飛ばされてしまったの」

「実験？」

「信じがたい話かもしれないけど、私たちは異世界から来てしまった人間を預かっていて、彼らを元の世界に返そうとしていたの。けれど…」

「失敗だった、と」

リフィルさんはうなづいた。

「…わかりました」

私はそのへんにおいてたゲームソフトを手にとり、ゲーム機のスイッチを入れた。

あー、男の人<sup>が</sup>ライフル構えてる。

「これ…見てもらえます？」

ゲームソフトは…テイルズオブザワールド・レディアントマイソロジー3。

「これは…！」

「どうこうこと…？」

「うおお俺がいる…！」

「ショリア…」

「おー何なんだよ、どうなつてんだよ…」  
「つちが聞きたいわ…」

「…あなたたちは、私たちの世界で言つ『御伽噺』の世界から來たのではないかと」

「おとぎばなし？」

「…ええ。あなたたちはそこから私たちにとつての『現実』に来た。  
それこそ、世界を飛び越えて」

「これからどうするの？」

「そんなことが…」

「あなたたちの言つて、仲間だつて…世界飛び越えてしまつたんでしょ？」

「おやりく、ヴァリトローパのあたりの」と。

「ベルセリオスの大失敗というわけか…」

「つまりこれは、異世界なのね」

「もうこうこと…でしょう」

「あー、ゆず茶おこしい。

「…」

紫ちゃんがお茶を飲んだ。

「私、ソフィ…よろしくね」

「こんなにまだ」

「…話を戻すわ。」

「…世界なの？」

「…魔法がない、魔物がない、とだけは言つておきましょ」

「そんな世界があるのか？」

「ありますよ」

「」

「ど、だけ？」

「国や地域によつて情勢は違うし、宗教も言語も政治も違つ。唯一の共通事項とこつたら、そんなもんです」

「なるほど…では、」

「ちよつと待つてくださいね」

高校のころの地図帳を引っ張り出し、日本を指差した。

「まあ、ちいさこ」

ピンクの髪の女人がつぶやく。

「」

「」

「」

「「」の国は、戦争の永久放棄を世界に約束し、最低限の自由を国民に約束しています」

「まあ、すばらしい！」

「治安は……世界基準で見たら良いほうだけど、悪い人は「」にでもいるのです」

「けしからんな」

騎士のお嬢さん、落ち着いて。

「ただし、悪いことをしたら刑務所…牢屋?「」100%、収容されます。人の命を奪うこと、人の命を奪おうとすることは、硬く禁じられ、破ると重い罪が課されます」

「それはこの国の王が決めたのですか?」

「……法律は、国民の代表が決めたという形をとっています。言いつれていましたが、「」の国の王は「」の国と国民の象徴であり、政治の実権は持たない代わりに、私たちの心のよし悪しである、ということになっています」

「政治の主権は、では誰に?」

「……20歳以上の成人男女です」

「なぜ20歳なのでですか?」

ピンクさん、勘弁して。

「いろいろな約束事や文化は追々語りながらひとつひとつ、お聞きしたいんですけど」

「なんでしょう?」

「あなたがた、これからいつたいひとつあるおつもりですか」

「どう…って……」

あ……考えてなかつたんですね。

「……どうか泊まりやあいいだろ?」

赤毛さん……。

「あなたたちのお金が「」で使えるなんて思つてませんよね……」

「な……！」

「野宿だな」

「絶対だめ！」

「ライフルもつて野宿してたら捕まります。

「どうしよう……？」

「どう…って…ルミナシアに戻る方法を見つけないと」

「どうやって？」

「それは…」

「あ、煮詰まつた。

「……えーっと…」

「沙羅

覚えておいでね、金髪の鎧さん。

「沙羅ー！急に来たのはあやまるし、びっくりさせないでめんーでも俺たちこれからどうして良いかわかんないんだ」

「おースタンー！」

「…スタンさんね」

「…あ」

「そうよ、あなたたちが乗つてない。

「だから…」

「どうして良いか教えてほしい？」

「うん」

「……わからないわ

「…え？」

「みんなが凍りつく、そりゃそうよね。

「だつて…そつちの研究者さんの間違いでしょ？私はそんなに頭がよくないし、どうしたらあなたたちを元の世界に戻せるのかを知らない」

「なつ…テメー」

「ルークお止めなさい！沙羅…気を悪くしないで、彼は」

「いいんです…この状況下でパニックにならないほうがおかしい」

「ありがと…」

「ごめんな、沙羅。俺もどうしていいか…」

力なくお礼を言つたリフィルさんの気持ち、悲しそうに笑うスタンさん、いろいろしているルーク…。

「…もう一度言います。私は、あなたたちが元の世界に戻る方法を知らない」

「…」

「…でも、雨露をしのぐ場所と衣食を保障することはできます」

「…え？」

「おい本当か？」

リフィルさんと騎士のお嬢さんが聞き返す。

「そんななりで外フラフラされても、私も後味悪いです。だから、この世界のルールを守ることを約束してくださるなら、この家で寝泊り食事してくださって構いません」

「あなた、本気で言つているの？」

驚いたような顔をするリフィルさん

「不都合ですか？」

「…小娘、お前には危機感つてものが無いのか？」

「三池です。えつと…」

「リカルド・ソルダートだ…ミイケ、お前はいきなり現れた見ず知らずの人間を泊めるのか？」

「…言い忘れていました。この国、日本では一般人の武器の所有を硬く禁止しています。刀、銃、剣もろもの類は役所に届出をして審査で認められなくてはいけません。あなたたちはこの國の人じやないから戸籍もないし、届出もできない。その状態で出歩いては、まず間違いなく刑罰の対象です」

「…」

「それに、この国で通じるお金も持っていないでしよう？あなた方が捕まつたり、のたれ死んだりしたら、御伽噺が変わってしまうかもしない。私はそれが怖いんです」

「もっともらしくそれっぽいことを言ひてみたけれど、事実。

「リカルド、私たちは今は彼女を頼るよりほかに手がないわ」

「…」

沈黙を破つたのは、ルーク君。

「もーなんでもいいだろ！面倒だから俺はここで我慢してやる」「そんな言い方…」

ソフィィちゃんがたしなめる。

「信用しろとも、感謝しろとも言ひません。ただ、どうするのが良いかはあなた方で決めてください」

「私は、沙羅を信じます。私はエステリーゼ・シテス・ヒュラッセイン。エステル、と呼んでくれます？」

「沙羅、よろしくね」

「ルーク君、ソフィィちゃん、エステル姫は決まりですね。あとは…」

「ありがとう、沙羅！俺もお世話になるよ」

「俺はチェスター・バークライトだ。世話になるぜ」

「スタンさんにチェスター君ね」

「すまないが、世話になつても良いか？私はクロエ・ヴァレンス。名門、ヴァレンス家の者だ」

「俺はカイウス・クオールズ…本当にいいのか？」

「構わない、つて言つてるでしよう？…リフィルさんに、リカルドさんはどうされます？」

「仕方ないわね。迷惑をかけるでしようけど、お願ひするわ」

「ただ飯を食わせろとは言わねえ。それ相応の働きはしよう」

「決まりね」

## おなかすいたね

2階の空き部屋たち…。

いつもお父さんやお母さんが帰つても良じように掃除しておこしてよかつた。

ルークには一（わがまま防止のため）一人部屋を使つてもらひ。

元々は来客用だつたんだけ、いいよね。

とりあえず、9人全員にベッドを支給することはできないので、布

団を敷く、

「手伝うよ

「あら、いいの？」

「だつて、お世話になるんだし」

「俺も手伝う」

スタンさんとカイウス君が手伝つてくれた。

「こっちの部屋は女性陣に」

2階のプレイルーム…昔はここで友達を呼んで遊んだつけ。

「こっちはルーク君以外の男性陣ね」

和室…お母さんの趣味だ。

「沙羅、ここは何です？」

「厨房ですよ」

某番組ではない。まあ、エステル姫には通じないだらうけど。

「…」  
「…」  
「…」

「それは電子レンジ、そつちのは冷蔵庫、それからこれは食器洗浄

器

メニュー変更。今日はカレー。

「お手伝いするわ」

「リフィルさんはお客様です」

エステル姫と一人でキッチンから追い出した。

「あ、ついでに言いますけど、『』がお手洗いです。『』が男性、『』が女性

「ありがとう」

「で、『』がお風呂です」

「男女別じゃないのか？」

「ギルド? とは勝手が違うのよ、スタン

あれこれと説明をする。

「だーーーーー もうつ！」

「ファブレ！」

「退屈だつてーのー何かねーのか！」

「はいはい」

リカルドさんの舌打ちを他所に、お坊ちゃんのところへ行く。

「これで我慢して

テレビせんヘルプ。

「…………なんだこれ」

「テレビ」

ちなみに、お父さんが買ったプラズマ大型。

「なんで板の中に入ってるんだ! 『』は大丈夫なのか! ?」

クロエさん落ち着こう。

「これは遠く離れたところでやつていることを、特殊な信号で家庭で見られるようにした装置です」

「へええええ…」

「ねえあなた、これで私たちの世界の様子も

「見れません。この世界の中のことだけ

期待させてごめんなさい。

「お手伝い…」

「あら、ソフィィちゃん」

「何か、するね」

「じゃあ、お皿を運んで

「うん」

「何か手伝います?」

「エスティル姫、じゃあそのスイッチを」

「これですか?」

「ええ」

「……」

「……」

「炊飯器。」

「飯をふつべらにする機械です」

「何か手伝おう」

「……クローバーさん。では、そここの箱を取ってください」

「これか? なんだこれは」

「カレー粉です」

「……」

「お手伝いするわ」

「リフィルさんもうできましたから」

「へえ、まあ食えそうじゃねえか」

「好みはわからないから、『ごく一般的な味だけ』

「ありがとう、沙羅」

「じゃ、呑じ上がり」

「…………」

「…………呑じ上がり」

「この家で、誰かと食事なんて久しぶり。」

「お父さんとお母さん、今どうしてるだろ?」

「飯は口に呑じるもの食べるのかな、変なものを食べておなか壊してないかな、日本食が恋しくなってないかな……」

「…沙羅？」

「え、あ！何？」

「…おかわり」

「早つ！」

「俺も！」

「俺も」

スタンさん、カイウス君、

チエスター君がお皿を突き出した。

## 食料を増やす必要があります

「お皿洗いますね」

「じゃあ、おなべとかまな板だけお願ひしますね」

他のお皿は食器洗浄器へ・・・。

「これ、なに?」

「あ、ソフィィちゃん・・・」

「す」「こ、これ、なに、え・・・」

まあ、これがある家庭もまだそんなに多くはないだろ?ハシ・・・。

「これがあつたら、クレアもロックスももつと楽になるでしょ?うね

「これ、どうやって動くんだ?」

エスティル姫とチェスター君も見にきた。

「ここにある大抵のものは電気で動いてるの」

「電気・・・この世界にもヴォルトがいるのか?」

「いなーから、人工的に作り出してるの。それを各家庭企業にこう

して送つていいわけなんだけど・・・」

「どうやって作ってるんです?」

「こりいろ手段はあるんだけど・・・あなた達の世界に応用はでき

なさそうよ?」

質問攻めに応えていい暇はないので、適当にかわす。

(インスタントでいいわよね・・・?)

お茶とコーヒーを淹れて、ごまかした。

おしゃべりは嫌いじゃないんだけど、私は電化製品に詳しへはないから・・・。

「うううーん・・・」

「沙羅、どうした?」

「ああ、クロエさん・・・あのね、食料がちょっとピンチかな、つて

いきなり9人増えたんだから、当たり前。

「そうか・・・すまない、苦労をかけるな・・・」

「そうじやないの、私、この家に一人だから、必要最低限のものだけ買つようにしてたの。足りなくなつて当然だわ」

「そうだったのか・・・その・・・」

聴きにくそうに言葉を濁す彼女。

「両親のことなら、健在よ」

「え、そうなのか？いや、しかし、女性が一人でこんな大きなところに一人なんて・・・召使や女中も見当たらないし・・・」

「そんな余裕ないわよ。両親とも忙しくて家に帰れないだけ。私は、しつかりこの家を守つてゐるよ」

「そうなのか。しかし・・・いろいろ、物騒じやないか？」

「魔物もいなし、セキュリティ・・・防犯も心がけてる。何より、ここは私が生まれ育つた家だから、離れたくないのよ」

「・・・良いご両親なんだな」

「まあ、娘が生活に困らないように保障はしてくれるしね。というわけで」

金庫から諭吉さんを1枚取り出し、お財布に入れた。

「私、食料品の買出しに行つてくるから・・・皆さんに、絶対外に出ないよう言つておいて」

「外出はダメなのか？」

「皆さん、いろいろ剣とか銃とか持つてるでしょ？さつきも言つたけど、この国だと、それは持つてゐるだけで刑罰の対象なの。だから、武装して外出は不可能なのよ」

「厳しいな・・・」

裏を返せば、それだけ平和ボケつてことなんだけど・・・そのあたりはおいおい話そつ。

「お願ひね」

「わかった」

さて、ドートを羽織つて、カバンに財布と携帯を入れて、鍵も持つ

て・・・

「沙羅、外出か？」

「あ」「あ」

カイウス君が私達を見つけた。

「クオールズ、私達は留守番だ」

「何でだよ。ちょっと出歩くぐらい・・・」

「だめだ！」こでは私達は沙羅の世界のルールに従わなくてはいけないんだぞ」

「少しごらい良いじゃんか！」

ケンカ・・・?

それは困る。この人たちのケンカは手が出るどろどろか武器や魔法ができるんだから！

「わかつた、わかつたわ」

「さ、沙羅？」

「ほーら」

「た・だ・し」

ピン、と指を立てる。

「剣はクロエさんに預けること。このコートを上から羽織つて、消して人前で脱がないこと。何があつてもひとつでふらふら行動せず、私の指示に従うこと！」

「・・・え？」

一気に私に言われて、カイウス君が固まる。

「それが守れないなら留守番！」

キツイ言いかたして「めんね。でも、あなたのためでもあるのよ。う、うん・・・わかつた」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0630z/>

---

異世界と遊ぼう

2011年12月5日21時54分発行